

両側性 vs. 片側性に生じる 皮膚疾患

山本 俊幸

多くの場合は両側性にみられる皮膚疾患でも、まれに片側性に生じることがある。たとえば、皮膚筋炎のヘリオトロープ疹は通常両側の眼囲(上眼瞼のことが多い)に浮腫を伴う紅斑がみられるが、片側性のことがある。片側性といっても、反対側にまったく浮腫性紅斑がみられないわけではなく、片側優位としたほうがよい場合もある。また、初めは左右差があり片方しか目立たなくても経過中に両側の眼瞼が腫れてくることもある。皮膚筋炎はほかの症状からも診断がつくので、眼瞼の浮腫性腫脹が片側性だから診断に至らないということはないと思うが、片側性という変わった分布を呈することにより診断に迷う疾患もある。

数年前、下肢の片側性のびまん性腫脹を呈した男性患者をみたときは、片側性なので好酸球性筋膜炎は頭に浮かばなかった。このときは患者が最初に外科を受診し、画像でリンパ管閉塞性疾患などを検索されている途中で皮膚科を紹介されたが、それらが否定されたということで後日再度受診された。その際に、もしかして片側性の好酸球性筋膜炎もあるかもしれないと思いPubMedで検索したら10例弱報告されていた。この症例を経験し、通常両側性にみられる疾患でも、片側性に生じることを念頭に置くようにした。

つい最近のことであるが、手背の蜂窩織炎を繰り返すということで内科から紹介された症例があった。受診時には症状はおさまっていたが、半年に一度くらい繰り返すとのことで、スマホの写真をみせてもらおうと蜂窩織炎とは思えず、ボクシンググローブ状の腫れだったのでRS3PE (remitting seronegative symmetrical synovitis with pitting edema) をまず思い浮かべたが、これまで繰り返したエピソードを聞くとすべて片側性とのことだった。カルテには“RS3PEを考えるが片側性なのが合わないか?”と記載しておき、その後調べたら数例報告されていた。

これらはほんの一例に過ぎず、ほかにも似たような疾患はあるだろうし、片側性とはいえないまでも、片側優位に生じる疾患は多数報告されていると思う。なぜ片側性に生じるのか、はっきりした理由はわからないが、大事なものは“何々は両側性である”という固定観念を捨てることだと思う。臨床経験をある程度積んだ皮膚科医よりも、むしろ若い皮膚科医の頭のほうが、柔軟なのかもしれない。